

令和7年度研究開発自己評価書

研究開発課題

様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く子どもを育成するため、自らの生活を語る「かがやく時間」を新設し、力強く自分の考えを伝えようとできる言語能力を育成する教育課程と指導法を研究開発する。

I 研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

「かがやく時間」の学習では、自分の生活そのものや、生活と結びついた発見、探究などを他者に対して伝える「個の文脈を伝える（話す）ことと、友だちのそのような発表を共感しながら聞き、わからないことやもっと知りたいことを質問したり、感想を述べたりすることを通してより興味や理解を深めることができたり、新たな課題を見つけたり、自身の探究活動に繋げたりするなど「文脈を受け止め（聞く）深化発展させる」ことの中で言語能力を育もうとしている。発表された内容について「おたずね（質問）」とその応答により深化発展させることが重要になっていることから、「話し合う（聞き合う）こと」を重視している。「書くこと」については、「かがやく時間」の中で十分に「書く」時間を確保しているとは言えない。しかし、子どもが自分の文脈の発表に向かう際の必然として発生する、「書く」活動の効果が非常に大きいと考えている。どのように発表すれば良いのかを細かく順を追って指導することは行っていない。しかし、子どもたちは、切実に、自分の文脈をより良くみんなに伝えたいと願う中で、発表するための「書くこと」に取り組むことになる。自分の「目標・知識・可能性を発達させる」ための「書く」活動だからこそ育まれる資質・能力があると考えている。

また、「かがやく時間」の学習で個の文脈を伝える活動は、自分の取組や経験を効果的に伝えようとするものが多い。その中で発表者の子どもたちは、説明文の学習や他教科の学習で学んだ事柄を生かしながら発表を行う。それにより、聞き手の子どもたちも既習事項を何度も繰り返し目にし、耳にすることを通して理解を深めていく。

さらに、この教科の最も大きな特徴は、子どもたちの学びに向かう力・人間性等を涵養させる教科である点にある。

①「伸びて行く」方向が見つけられる教科

「かがやく時間」の学習では、繰り返し、自分と等身大の友だちの真摯な発表に触れることになる。子どもたちは、友だちの発表の様々な良さを感じ取る中で、「ああ、自分もあのように発表できるだろうか」と漠然と目指す姿を探し始める。自分の発表が近づいてくると、「よし、あの子のこんな良さを取り入れてみよう」「いや、あの子の良さを自分らしくアレンジできないか」と、自分の目指す姿のイメージを少しづつ明確にしていく。さらに発表の準備を進める中で、時に自分自身で思考錯誤したり、時に家族に意見やアドバイスを求

めたりして、今自分の力でできることの少し先にある、自分の努力や他人からの援助を得て実現できる目指すべき姿を明確に思い描くようになる。自分がどう「伸びて行く」のかを思い描けるようになることが、決定的に重要であると考えている。

②自分の成長への期待感を高める教科

「かがやく時間」の学習では、一人ひとりの発表の時間を十分に確保する。一人で約20分間、発表して「おたずね」に答え続ける。自分が主役であり、やり甲斐のある時間でもある。何より子どもたち自身が自分を見定めた「伸びて行く」姿を実現することへの期待を高めていくことが感じられるのである。実際、約20分間の発表を終えた子どもたちの様子からは、自分が目指したことへの達成感や喜び、うまくいかなかつたことへの悔しさといった感情を強く表すことが多い。そうした強い感情が沸き起こるからこそ、次回の発表へ向けた自分の頑張りや成長に、より大きな期待を膨らませていく。「かがやく時間」は、一人ひとりの子どもが繰り返し自分の文脈の発表に取り組む中で、自分の目標・知識・可能性を発達させていくことも大きな特徴のひとつである。

③実践的に生きて働く言語能力を育む教科

「かがやく時間」の学習では、一人ひとりの子どもが約20分間、発表して「おたずね」に答え続けることに繰り返し取り組んでいく。こうした取り組みを通して、圧倒的に実践的な言語能力が育まれていく。自分の文脈を分かってもらおうと願い組み立てる発表の構成や、そのために駆使する表現技法、自分ならではの文脈に伴う専門知識や用語をかみ砕いて伝え合う中で育まれる語彙力など、実践的に取り扱われる言語能力も圧倒的に高度なものとなる。こうした発表のやり取りを学級の人数分繰り返すのだから、そこで育まれる言語能力も圧倒的なものとなっていく。一部の、国語科として扱うべき知識技能を除いて、言語能力を有意に育むことができるものが「かがやく時間」なのだと考えている。

④多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない教科

「かがやく時間」の学習は全ての子どもにとって楽しい学習となるだけでなく、特に従来の学習で活躍しにくかった子どもにとって楽しい学習となる。それは、本校の長年の取組の中でも強く感じてきたことであり、本校児童の様子からも確認できることであった。また、本校の実践を参考に「かがやく時間」を実践した公立小中学校からも同様の報告がなされている。「従来の学習に参加しにくかった子どもが、『かがやく時間』の学習は楽しみにする」「場面緘默だった子どもが、話せるようになってきた」「なかなか学習に参加できなかった子どもが、国語や算数でもノートを開くようになってた」といった報告である。「かがやく時間」という新教科は、従来の学習で活躍しにくかった子どもをはじめ多様な子どもたちを育む観点からも重要な教科となると考えている。

⑤個別最適な指導の在り方を見つめ直せる教科

「かがやく時間」の学習の指導では、一人ひとりの個別最適な学びを引き出し、それぞれの良さを価値づけ、子どもたちの目指すべき姿を明確にしていくことが肝要となる。つまり、「かがやく時間」の指導を続けることが、即ち、それぞれの子どもの個別最適な良さを見つけ、価値づけて目指す姿として伝える授業力を磨くことにつながっていく。「かがやく時間」の指導を通して培った、多様な子どもたちの真摯な学びを引き出したり、それぞれの学びにある価値を見出したりする力は、全ての教科領域において活用すべきものである。「かがやく時間」の指導法が、全ての教科領域において個別最適な学びを実現することにつながっていくと考えている。

⑥発達支持的生徒指導として、とても有用な教科

文部科学省の『生徒指導提要』(2022年改訂)で重視され、従来の「問題行動への対応」中心から「発達を支える日常的な働きかけ」へと転換が求められている中で、この「かがやく時間」は、児童生徒が自ら主体的に成

長・発達する過程を支え、すべての教育活動の基盤として日常的に行われる生徒指導の在り方としても大変有用な教科である。

(2) 教育課程の内容は適切であったか

「かがやく時間」の環境設定

本研究開発の新教科「かがやく時間」の特徴である、子どもの文脈の発表に反復して取り組むことの効果について、運営指導委員の奈須正裕教授（上智大学）からは、「日常的な文脈の中で継続的に実施されること、個々人の発表時間が十分に長く取られていることなどの点において、その深まりと躍動感には格別のものがあると感じられた。教科書に沿った期間限定の一過性的な取り組みではなく、「かがやく時間」の活動として、生活の一環という位置づけで実施されることのアドバンテージは明白である。（令和6年2月公開研究会・運営指導委員会）との評価をいただいた。

奈須先生のコメントにもあるように、日常的に発表が繰り返し行われることにより、自身の発表と友だちの発表を比べる機会が多く設けられること、その上で自身の次の発表に生かせることで、生きて働く力に繋がっていくことが見えた。これによりこの教育課程の内容が適切であったと言える。

また、発表が子どもの生活と繋がった日常的な文脈の中で行われることも大きいと見る。その場限りに与えられた課題について発表するのではなく、自身のことを発表するからこそ、そこには個々の切実感、自分ごとであるという思いが含まれる。それは聞き手にとっても大変に魅力的なものとなり、興味を持って聞くことができるることはもちろん、新たな知識を得たり、他者の新たな理解に繋がる発見があったり、自身の新たな興味に繋がるものであったりする。このことも大変に子どもたちの力を伸ばす環境設定であることから、適切であったと言える。

発表時間が長い場合 20 分という十分な時間設定をしていること、学級全員に対して発表すること、発表するだけでなく、必ず聞き手がおたずね（質問）すること、そしてそれに応えることという環境設定も、子どもたちの力を伸ばすために重要、且つ適切な内容であったと言える。

教育課程の一貫性

1 年生の入学直後から「自己紹介」や「みんなに見せたいもの」といった課題で始まるこの活動は、6 年間、その学年に応じて課題や教師の価値づける内容は変化するものの、子どもたちにとっての活動は一貫して同様のものとして行われる。学校・子どもたち・保護者にとってもこの「かがやく時間」は文化となっている。毎年毎年繰り返されることにより、これまでの経験が次に生きる。ふりかえりによって「よかつたところ」「改善すべき点」を明確にしていくわけであるが、それが次に繋げられることを子どもたちも意識できているため、ふりかえりがしっかりと生きていく。ここが非常に有用である。

1 年生ではここまで、2 年生ではこんなことも…という考え方ではなく、子どもたちも自然に 6 年間を通しての繰り返しの学習の中で力を伸ばしていくという意識が、教師も保護者も 6 年間の中でどう伸びて行くかを見守りながら適宜支援を行っていく。これが子どもたちの学びに向かう人間性を涵養することに大きく影響していると考えている。短いスパンで「できた」「できなかった」と評価し、点数をつけることなどない。そこが子どもたちの、安心してチャレンジできる、ふりかえりを生かそうとできる、自分で意欲的に取り組もうとできるなどのポイントになる。この実践の重要な点である。

他校の実践による成果

公立小中学校6校でも同様の実践がなされ、どの学校からも「子どもたちの主体的な姿勢の向上」「学習意欲の喚起」「自尊感情の向上」など本校の児童に見られた成果と同様の成果が見られたという報告が成された。このことからも、この教育課程の内容が適切であったということが分かった。

(3) 授業時間についての工夫

第1～4学年では「国語」科の内週3時間を削減し、週2時間の新設教科「かがやく時間」を設置する。また、第5・6学年では「国語」科の内週2時間を削減し、週1時間の新設教科「かがやく時間」を設置する。第1～6年の全ての学年において、総時間数を週1時間削減することになる（仮説4）。パフォーマンス課題の配列に関しては、子どもの文脈を伝えることについて、児童の実態に合わせた内容を配列するようにした。

2 指導方法・教材等

(1) 実施した指導方法等の特徴

新教科「かがやく時間」は、子どもが自らの生活を語り、聞き合うことに反復して取り組む学習としているところにその特徴がある。そのためこの時間は、一人の子どもが自らの生活を語る（発表する）場面と、それに対して聞き手の子どもたちが「おたずね」をして聞き合う場面とで構成される。学年やパフォーマンス課題によって異なる場合もあるが、通常、1時間に2～数名程度の発表を取り扱うことが多い。

こうした学習の性質上、この新教科では、その日学ばせるべき内容を予め決めることができない。その時間の発表者や発表内容にあるよさの中に、子どもたちがそれぞれに目指そうとする学びを見つけることが大切になる。等身大の友だちが見せる発表の姿を、どこかで次に自分が発表する姿と重ね合わせ、自分の成長の方向を感じ取る学びを大切にしたい。等身大の友だちの頑張る姿だからこそ、自分も同じように伸びようとする気概も育まれていく。さらに、やがて回ってくる自分の発表に向けて自発的に努力を重ねる子どもも増えていく。

こうした学習の指導で大切にしたいのが、「教わってから考える学習」から「考えてから教わる学習」への転換である。つまり、まず教えてそのことを習得する活動をさせるのではなく、一人ひとりの子どもが個別最適に追究したことの中にある価値を、子どもに目指せる姿として教えることを目指したいのである。さらに、教師が価値づけて示した内容は、即すべての子どもに身につけさせることが大切なのではなく、こうした学びの反復の中で様々に価値づけられるよさを、次の自分の発表に生かそうと目指せることを大切にしたい。個々の発表が十分に長く確保され、日常的な文脈の中で継続的に実施される学習の中で、個別最適に個々の子どもが自分の成長を目指すことができる。こうした学習を実現できる教科であると考えている。

(2) 指導方法等は適切であったか

6年間にわたる「かがやく時間」の課題の配列と内容の大枠を統一し、「私のつたえたいこと①」「自由研究発表」「私のつたえたいこと②」と設定したことは、指導者にとって分かり易い形で年間の見通しをもてる良さがあった。それは、子どもにとっても同様で、次の活動を見通しながら発表できる良さがあった。また、「私のつた

えたいこと①」や「私のつたえたいこと②」では、大枠は決めているものの、具体的な課題については、「じこしようかい」や「私の夢中になっていること」など例を示しながらも自由に裁量できる余地を残した。これによって、各担任はそのときの子どもの生活や興味を見取りながら、相応しい課題を設定することもできた。

しかし、それぞれのパフォーマンス課題の目標の在り方については、再考の余地があると考える。それは、「かがやく時間」の学習では、各課題の目標を意識しながらも指導は常に全方位的に行う立場をとっているからである。低学年では、まずは自己を表現することを重視したため、すべての課題を通して話し手を中心に目標を設定していたが、聞き手についても目標を設定して年間の育ちを意識する必要があったと考える。また、「かがやく時間」の特性上、低学年でも高学年の目標である「人数や時間に合わせて、自分の話し方や聞き方を調節することができる」の目標を目指すことは可能である。これらについては、発達段階も加味しつつ、どのような形で目標を位置づけるのか、また、その内容をどのようなものにするのか再度、見当の余地がある。

指導事項については、年間を通して段階的に身に付けたい力を整理することで、指導者は、学習中の指導の観点が明確化され、それに基づいて指導や助言が行えるようになった。例えば、「自由研究発表」を行った際、指導者はその子の研究や発表の仕方の良さを場当たり的に価値づけがちであったが、年間を通して目指す子ども像を見通した上で助言や称賛ができるようになった。また、低・中・高学年での指導の傾斜も明確になったことで、目の前の子どもに何を伝えることで先のどんな子ども像につながるのかを長期的な視点でも考え、指導や助言を行うことができるようになった。このように、昨年度は6学年分だった年間計画が低・中・高学年の3段階になったことにより、指導者側に「かがやく時間」が目指す子ども像の理解が深まり、それが子どもの見取りをより確かにした。

II 実施の効果

「1 児童への効果」

「かがやく時間」に育もうとしている「より高度な言語能力」は、例えば「様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓こうとする」力につながっていくものと考えている。こうした力につながる内容のひとつとして、本校児童の自己肯定感等についてのアンケート調査を実施した。このアンケートの調査結果と、子ども家庭庁の「我が国と諸外国の子ども若者の意識に関する調査（R5）」における、日本・アメリカ・ドイツ・フランス・デンマークの調査結果の比較を試みた。アンケートは①私は、自分自身に満足している（自尊感情）②自分には長所があると感じている（長所）③自分は、親から愛されていると思う（家庭への満足度）④自分の考えをはっきり相手に伝えることができる（主張性）⑤うまくいくかわからないことでも意欲的に取り組む（挑戦心）⑥自分は役に立たないと強く感じる（自己有用感）という6つの項目について、それぞれ、そう思う・どちらかと言えばそう思う・どちらかと言えばそう思わない・そう思わないの4段階での回答とした。

ここでは、これらの調査結果について、肯定的な回答（そう思う・どちらかと言えばそう思う）と否定的な回答（そう思わない・どちらかと言えばそう思わない）のうち肯定的な回答の割合（但し、⑥自己有用感については、逆転項目であるため否定的な回答の割合）を一覧にして示す。（令和5年度の各国の調査結果および令和5年度・令和6年度・令和7年度の本校児童の調査結果）

	日本	アメリカ	ドイツ	フランス	デンマーク	本校 R5	本校 R6	本校 R7
①自尊感情	57.4%	73.2%	73.9%	75.6%	72.3%	75.6%	91%	81%
②長所	65.6%	82.6%	85.2%	81.2%	73.1%	81.1%	83%	88%
③家庭への満足度	80.8%	79.8%	82.9%	80.3%	80.9%	94.7%	95%	95%
④主張性	57.1%	71.5%	74.0%	72.3%	70.7%	79.2%	85%	78%
⑤挑戦心	56.4%	76.2%	76.2%	80.0%	71.2%	82.1%	94%	83%
⑥自己有用感	53.9%	34.6%	46.7%	44.7%	46.3%	71.9%	79%	74%

これらの結果からは、本校児童の自己肯定感等は日本の子ども・若者に比べて相当に高いだけでなく、諸外国の子ども・若者に比べても同程度もしくは高いことが示された。

本校児童の自己肯定感等が高いことが示された原因が、必ずしも「かがやく時間」の効果であるとは言い切れないかもしれない。ただ、「かがやく時間」の学習内容が自分の得意なことや好きなことを工夫して発表し、その良さがみんなに認められていくといった内容であることから、これらの結果に「かがやく時間」の効果が表れているとみて差し支えないと考えている。「かがやく時間」を実施してきたことの子どもたちへの効果として、本校児童の自己肯定感等が日本の子ども・若者に比べて相当に高いだけでなく、諸外国の子ども・若者に比べても同程度かそれ以上に高くなるという効果があったと考えている。

他校の実践に見られる児童・生徒への効果

本校の研究協力校等の学校の中に、個の文脈の発表や「おたずね」による学習を実践しているところがある。各学校における児童への効果として以下のような報告があがってきた。

ア 宮津市立吉津小学校

- ・ 子どもたちの素朴な考えを出し、聞き合い答え合うことで、学級の話題が生まれるようになること。
- ・ 学級の話題の中で問題が生まれ、そうした問題に取り組むことを通して主体的に学習する雰囲気が生まれること。さらには、主体的に学習する雰囲気は、あらゆる学習にも波及していくこと。

子どもたちの生活を語り合うことで、子どもが主体的に学ぶ雰囲気を生み出せることが、「かがやく時間」がもたらす児童への効果のひとつだ言える。

イ 大津市立比叡平小学校の1年生

- ・ 学級集団として、教師や友だちの話が聞けるようになったり、積極的に自分の考えを話せる子が増えたりするなど、学習態度の改善と学習意欲の向上が見られた。
- ・ 学級内で多く発生していた児童間のトラブルが、「スピーチの時間」の取り組みをはじめて減少した。
- ・ 特に、これまで、学習に参加できないことの多かった児童が、「スピーチの時間」をきっかけとして積極的に学習へ参加することが増え、こうした効果が、「スピーチの時間」以外の時間にも波及している。教科書の文脈や学級で共有した問題意識での文脈には入りにくい児童でも、その日の話題によっては大いに興味を掻き立てられることも多いに違いない。だからこそ友だちの話に体を向けて聞き始めたり、自分の考えを積極的に述べたりする機会も増えていく。こうした経験を積み重ねることが、他の学習場面にも波及し、子どもの学びに向かう力を涵養することにつながっていくことが、決定的に重要なのだと考えている。

ウ 大津市立瀬田東小学校の6年生

アンケート結果は、多くの児童が「スピーチの実践が、自分のことを知ってもらったり、学級の友だちのことを理解したりすることに役立っている」と回答している。また、聞き手の児童も学級全員の「その子らしさ」や「その子の思いや考え」を親友のごとく知ることになる。こうして、児童同士の自己開示や他者理解が進むことで、学級のみんなに自分のことを知ってもらえる喜びや満足感から、自ずと個々の児童の自尊感情や自己有用感は高まっていった。また、互いを認め合う心が育つため、子ども同士が繋がり、居心地の良い安心感のある学級が形成されていった。（学級自慢になるが、午前日課で終わる日の放課後の校庭には、いつも自身の学級の3分の2を超す子たちの姿があり、日が暮れるまでみんなで仲良く遊んでいる。）対話の土台である「互いの思いや考えを認め合う学級づくり」が進むことで、受け入れられる安心感から自分の考えを発言することのハードルが下がり、学習中の全体対話に参加する子どもが少しづつ増えていった。また、友だちの考えに対する関心も高まり、友だちの発言と自分の考えとを繋げて聞くことで、対話が繋がり、その中身も濃くなつた。

エ 生駒市立鹿ノ台小学校

- ・みんながちゃんと聞いてくれているところがいい。楽しいところは、みんなに聞いてもらえてること。
- ・発表したり聞いたりするときに、いろいろなことがわかって、聞くことや話すことが好きになった。
- ・聞くことが楽しみだし、いろいろな話が出てくるのが楽しい。ふりかえりをいっぱい書けるようになって楽しい。

相手の立場に合わせて伝えたいことを焦点化し、相手に届くように工夫することで聞き手にとっての心理的安全性も高まる。聞き手が相手の話を聞こうとする姿勢で内容を理解しようと受け取ることで、話し手は安心して伝えようとすることができる。この実践は小さな成功体験の積み重ねであり、児童の発言や変化を見取ってその都度価値づけながら継続していくことで漸進的成果が見えてきたのである。

オ 舞鶴市立若浦中学校

- ・回を重ねるについて、「主体性」「探究心」「相互理解」という非認知能力の高まりが感じられた。
- ・そうした能力は他の学習や日常生活でも發揮され、様々な場面で生徒の成長が見られるようになった。
- ・「学校が好き」「学校が楽しい」と感じる生徒の割合などが増加しただけでなく、不登校傾向の生徒が減少してきている。

若浦中学校校長は、こうしたパフォーマンス課題を「究極の自慢大会」とも表現された。存分に自分の自慢をする学習の中で、生徒の各種の能力が高まるだけでなく相互理解が進む。だから生徒が学校を好きになり、お互いを理解し合えるようになると話されていた。

カ 舞鶴市立城南中学校

スピーチ活動により、生徒が自分を語り、互いを認め合う風土が広がりつつある。奈良女子大学附属小学校への教員視察を通して教師も教育的効果を実感し、取組の質が向上した。その結果、生徒の自信や意欲、人間関係が深まり、昨年度に比べ不登校出現率は半減。学校全体に安心して語り合える文化が根づきつつある。

各学年で自然にミニフェスが開催（7月）され、生徒が自ら考え、仲間と協力して表現する姿が広がった。教職員も「任せて育てる」ことの意義を実感し、学校全体に「語る・表す・認め合う」文化が定着し、スピーチ活動の質を高める確かな土壤が築かれつつある。

6つの公立小学校・中学校での児童・生徒への効果と本校の児童の様子から、「かがやく時間」について次のことが見えてきた。

自ら生活を語る「かがやく時間」の学習では、借り物の文脈ではないオーセンティックな学習問題が生まれやすい。こうしたオーセンティックな問題を、積極的に総合的な学習や他教科の学習で取り上げ、教科横断的に取り扱うことができる大きな特徴である。しかし、それだけであれば、従来の「総合的な学習」や各教科領域との教科横断的な取り扱いとする方が相応しいともいえる。「かがやく時間」を新教科とすべきであることの理由として、自らの生活を語る学習だからこそ「自分の目標・知識・可能性を発達させる」ことにつながることが挙げられる。それぞれの子どもが語る生活の良さに着目するからこそ、一人ひとりの個性や育ちを感じ合い、他者を尊重するとともに自らも成長しようという気構えを持つことにつながる。新教科「かがやく時間」は、常に学級としての学びが求められる従来の枠組みの学習ではなく、それぞれの個がそれに伸びようとする「個の学び」を重視するところにその独自性があることが見えてきたのである。

「2 教師への効果」

本研究開発での教師への効果は、年間計画や「学びの評価マップ」を作成したことにより、「かがやく時間」の指導の見通しが持てるようになったことが挙げられる。特に、低・中・高というくくりで作成したことや、どの学年でも「私の伝えたいこと①」「自由研究発表」「私の伝えたいこと②」というくくりで作成したことにより、「かがやく時間」の全体像が捉えやすくなった。そのため、日々の指導に当たって、先の見通しを持った指導がしやすくなっている。

その他、教師への効果を以下に示す。

- ・子どもの興味関心や考え方を深く知ることができるため、日常、子どもと接する際にきめ細やかな接し方ができるようになった。
- ・事前に教える内容を練り上げて臨む授業ではないため、即興的、創造的に指導する力が高まる。
- ・子どもの学びに沿って価値づけることに取り組むため、その発表の中心や良さを的確にとらえる力や、中心や良さについて、具体的な価値づけを伴う言葉を厳選して伝える力が磨かれる。
- ・子どもの、こと・もの・ひとへの興味関心を知ることで、児童理解が進む。 \Rightarrow それぞれの興味関心を生かした個性を育む教育への視野が広がる。
- ・これまで行ってきた「朝の会」「自由研究」などに、研究開発学校の研究として取り組んだことで、これまで以上に、子どもの資質・能力を育む教師の役割について考えることができた。
- ・これまで行ってきた「朝の会」「自由研究」などを、他の教員がどのように考えどのように取り組んでいるのかの具体を知ることができ、そのことが自分の実践にとても役に立っている。

「3 保護者等への効果」

「かがやく時間」を実施することの保護者への効果として特筆すべきなのは、保護者の学校への関心が高まっていくことにある。「かがやく時間」についての保護者へのアンケートの中で、「かがやく時間」を参観することのメリットやデメリットについての自由記述をいくつか紹介する。

「子供自身の学校での様子が知れるだけでなく、子供が主役の発表を見ることで本人のモチベーションも上がる。また、他のお子さんの反応が見れることも楽しい。メリットしかありません。」

「発表を親が参観することは、子どもにとって最大の共感になり、安心を積み重ねていける気がしておりますので、参観させていただける事に大変感謝しております」

「子どもの学校での様子や心のこもった発表をリアルに見学する事で子どもの成長を感じられる」

「練習した成果を親に見てもらう という事は娘にとっても重要な事だと思い参観をしています。質問が多かったとき、又は少なかった時でも、その状況や空気感を親と子で分かち合うことで、次の発表の仕方に工夫が出て来る気がします。」

「一年生から六年生まで教室の全員がどんどん成長していく姿を目の当たりにして、この学校でみんなと一緒に過ごせた事が子供達にとって生きて行く土台となっている事が親として安心出来た」

「家庭で考へてる以上の子供たちの発見やおたずねにいつも驚かされ、またその事について家庭で話すことができるので参観させていただける事に感謝しています。とても楽しい時間を過ごさせていただきました」

保護者は、「かがやく時間」の学習の中で子どもの真摯な学びが引き出され、子どもが継続的に成長していく姿を捉えている。だからこそ『かがやく時間』の様子を参観することが、学校と保護者や思いを共有して子どもを育むことに有効だと思いますか」の設問に、9割の方が肯定的に答えた。実際に「かがやく時間」を参観していると回答された割合も80%を超えており、保護者への効果として、「かがやく時間」は子どもたちが確かに成長していく時間であると捉えるようになり、その学びに寄り添うことで学校とともに我が子を育もうとしているところにあると考えている。

「III 実施上の問題点と今後の課題」

これまでの「かがやく時間」の研究開発の過程で最も苦労しているのは、子どもの文脈の発表からはじまる学習での教育課程をいかに示すのかということである。

研究開発当初は、パフォーマンス課題ごとの違いやそれぞれの目標を明確に示して配列することで、教育課程の内容を示せるのではないかと考えた。しかし、実際に進めてみると、パフォーマンス課題ごとの違いやそれぞれの目標を明確に示すことが思った以上に難しく、細かいパフォーマンス課題を配列することがそぐわないことが見えてきた。「かがやく時間」の学習は、一人ひとりの創意工夫を引き出し、多様な「よさ」が發揮されることを大切にしたいのに、パフォーマンスごとの目標を狭めることでそうした「よさ」が發揮されにくくなるからである。そこで、子どもの自由な発想での追究を引き出すと同時に、こうした学びの反復を通して目指す姿のイメージを高められる「ゆるやかなパフォーマンス課題」を、全学年統一して示すようにした。

評価基準の作成についても、パフォーマンス課題ごとの目標に沿った評価基準を示すことが難しく、ゆるやかなパフォーマンス課題において様々にあらわれる「よさ」を評価する方法として、子どもの成長の方向に合わせて評価できる学びの評価マップという形で作成するようにした。ただし、この評価マップは、現行の学習指導要領（国語科）の言語能力にかかわる部分を中心に作成しており、より高度な言語能力にあたる部分の評価基準とはなっていない。

それも踏まえ、今後の課題としては次の2点を挙げる。

①「かがやく時間」の指導法

「かがやく時間」の主なコンセプトは、子どもが自らの生活を語ることの反復の中から、子どもたちが目指すことのできる「よさ」を具体的に見つけ出す学習にある。従って、発表の仕方や研究の進め方などを丁寧に教える指導法ではなく、子どもたちが自分なりに工夫や努力をして発表したことのある「よさ」を、いかに見逃さずに価値づけて教えるのかの指導法を明らかにすることが必要だと考えている。この指導法の究明については、他校の実践に繋がるよう分かりやすく示すことができるものにしていく必要がある。

②「かがやく時間」と教科横断的な学び

これまでの研究で、「かがやく時間」には様々な教科横断的な学びが生まれやすいことは確認している。しかし、研究仮設4【カリキュラムオーバーロードへの対応】に挙げている「教科横断的に取り組む内容や他教科から削減する内容の検討を進める」ことについては、思うような結果は得られてはいない。それは、子どもの自由な発表から生まれる教科横断的な学びは、毎年必ず取り扱える内容と位置付けることに無理があるだけでなく、関連教科との連携を計画的に行うことも難しいと判断している。従って「他教科から削減する」内容として取り出すことは困難であると言わざるを得ない。とは言え、子どもの文脈による発表が、多くの子どもにとってオーセンティックな学びとなりやすいことや、多くの発表が子どもたちの思考や生活に影響を与えていた（日々の日記に、友だちの発表についての考え方や実際に試したことが綴られている）様子を考えれば、それぞれの教科で捉えるべき思考力・判断力・表現力等を下支えする効果は十分にあると考えている。こうした視点からの研究を引き続き進めたい。